

大谷學報 第二十卷 第一號

曇鸞大師の教學管見

源 廣 宣

曇鸞の淨土教はその代表的著作たる淨土論註によりて伺ふべきこと勿論であるが、その開卷劈頭に於て、龍樹が阿毘跋致を求むるに難行易行の二道ありと爲せる説を掲げて、その所謂易行道を開演したものが天親の淨土論であつて、これもと世尊が無量壽佛の莊嚴功德を説き給へる淨土三經の所説を承けたものであり、即ち上行之極致不退之風航なりといつてゐることは、淨土論そのもの、位置性格を決定すると共に鸞師自身の立場を闡明したものであることは云ふ迄もない。而して龍樹にありては固より自ら終にその易行道に歸したのであるとは云へ、二道を開く出發點に於ては、たゞ懦弱下劣の凡夫の爲めに僅かに設けたる方便道に過ぎぬ如くであつたが、曇鸞は龍樹が終に難を捨て、易に歸したるその歸結を受けて、寧ろ易行道が吾等にとりて唯一の道であることを先づ示してゐる。即ち難行道たる所以とし

て掲げられた五難といふは、先人の注意せる如く、その道が過難多くして事實上吾等の進むべき道として成立し得ざるものなることを、その時代相社會相を検討し、彼れ自らの實踐に照すことによりて明にしてゐるので、そこに自ら易行道が之に反してそれらの過難を離れ得る所以を顯はしてゐる。而して五難は結局その第五の「唯是自力無他力持」の一に歸し、こゝに曇鸞は龍樹の難易二道といふはこれやがて自力他力の二道であると爲し、その他力易行道が自ら信順する唯一の道なることを表明してゐる。謂く「但以信佛因緣願往生淨土乘佛願力便得往生彼清淨國土佛力加持即入大乘正定之聚」と。論註全體のあらはさんとするところは恐らくこの言に盡きるものであつて、鸞師が如何に佛願力を高調せるか、即ち吾等が現に正定聚に住して必ず往生を得しめらるゝは偏へに佛願力の加持によるもの、吾等はたゞ之を信じ之に乘托するのみなりとの意を明かにしてゐるかを見るべきである。もとゞ天親の淨土論が大經の説意によりて如來の本願力を明したものであるから、それを註釋せる鸞師の意のこゝに存することは當然であるが、右の語によりても鸞師の意が單に本願力をあらはすといふに止らず、その本願がすべてを攝持すること、換言せば衆生往生の因果が全く本願力に依ることを明さんとするにあるを見るべきである。かくしてはじてこの他力道が一切衆生の歸すべき唯一の道としてあらはさるゝことゝなるのである。こゝに於てその本願とは如何なる意味であるか、又これと必然の關係ある淨土、如來、衆生等が如何なる意義であるかを尋ねてみたいと思ふ。

二

先づ淨土が如何に顯はされてゐるか。論の初めに勝過三界道といふ、之を解釋して註には三界はこれ虚偽の相、輪

轉の相にして顛倒不淨なるに對して、淨土は不虛僞不輪轉の畢竟安樂清淨處なりといつてゐる。これ所謂不實功德に對する眞實功德相であつて、一は有漏心より生じて法性の理に順ぜざる凡夫人天の感ずる顛倒業果の世界であり、一は菩薩の智慧清淨の無漏業を以て法性に順じて莊嚴せる眞實の世界である。之によれば淨土と三界とは法性に順ずると順ぜざると、無漏と有漏と相對してその根柢を異にせる別々の世界なるが如くである。けれどもそれは互に關係を絶離すといふ意味ではなく、その根柢を異にせる別々の世界が兩々面々相對立するその根柢に、對立以前の本来の一如があり、その一如法性を證顯する佛智の照すところにこれらの對立も明に顯示せらるゝのである。鸞師は實相を知るを以ての故に眞實の法身を知ると共に、又三界衆生の虛妄の相を知り、法身を知るを以ての故に眞實の歸依を起し、衆生虛妄の相を知るを以ての故に眞實の慈悲を生ずと爲し、如來がその正觀の慈悲よりして衆生を悲憐してそれをして清淨安樂の處を得しめんと願心よりして淨土は莊嚴せられたものといつてゐる。その如來の願心といふはもと本然一如より來生し來るもの、畢竟するに一切衆生の眞實の念願理想でなければならぬ。まことに三界はこれ凡夫生死流轉の閻宅として吾等の現實の世界であるが、その現實の虛妄を感知する者は必ずその理想としての眞實實性の世界を求めずにはゐられない。しかもその現實を虛妄顛倒なりと知らしめらるゝことは之を超越せる眞の理想界の存するが爲めである。理想は吾等の現實を根柢としてその中より生れ出るところであるけれど、又還りて之を照し之を批判して之を成立せしむる本である。鸞師は「かくの如きの因を以てかくの如きの果を得、かくの如きの果を以てかくの如きの因に酬ふ。因に通じて果に至り、果に通じて因に酬ふ、故に道といふ」といつてゐられる。これ三界道の道に對する説明であるが、これはやがてあらゆる修成の世界の道理關係を示し得てゐるものと思ふ。即ち淨土は三界を

勝過すとあれども、決して互に相隔絶せる境界ではなくして、法性に順ぜる無漏清淨の土は吾等の究竟歸入の理想界として、吾等の願樂は常に彼土を目指すと共に、又淨土の光の照被を外にしてはこの三界の眞の意義を知るに由なきところの、即ち吾等の畢竟依處として、この三界を成立たしめてゐる本源の土であつて、彼此相呼應、不可思議なる交流を爲してゐるのである。

又、性功德の下を見るに、淨土はこゝにも法性に隨順し法本に乖かざるものであると共に、法藏菩薩が諸の波羅密を積習して以て性を成じ、その性より莊嚴せられたものと云つてゐる。法性とはその文字の示す如く法の本性であり諸法本然の理であつて、あらゆる萬法現象は皆之を根柢とし又これを歸結とするもの、又そは一切の如來を生む本源なると共に如來の正覺の智慧によりて顯はさるゝものであつて、久遠より永久に互りて改むべからざる眞理ともいふべく、所謂眞如實性と名けらるゝところである。が、かゝる意味に於ての法性は永久不變不生の眞理といふのみであつて、なほ抽象的理性であり、未だ吾々の現實の世界へはたらきかける力となるに至らない。然るにこゝに法藏菩薩の功德積習によりてその法性を開覺し、それに順じて願を發し淨土を建立莊嚴せることは、その法性に具體的な形を與へ、衆生界へ廻向する力用をはじめて備ふることゝならしめる。而してその法性は吾等の所歸の理想として無爲自然の世界であり、涅槃平等の境界であるが、他の一面に於ては必ず三界差別の世界に應同し攝取するものでなければならぬ。而して三界虛妄の衆生に對すればおのづから眞實の慈悲を生ずるので、こゝに法性は法藏菩薩の發願修行によりて正道大慈悲となつてあらはれたのである。鸞師はこの大慈悲を以て諸法平等の相より自ら等流出生し來る所以を明かにし、之を佛道の正因なりと爲し、又之を淨土の根なりとしてゐる。即ち法性一如の眞理が等流現行して大慈悲

となるところ、これ淨土を成立せしむる根據であつて、彼岸に勝過しつゝ、能く現實の世界を救ひ得る所以はこゝに存するのである。もとゞゞ淨土の莊嚴は如來の願心を以て莊嚴成就せるところとは天親論主の既に明に證示してゐるところであつて、その願心とは大慈悲に外ならず。鸞師が論註上卷に於て二十九種の莊嚴を説くにあたりて、一々常に佛本何が故にこの願を興し給ふやと自問を設けらるゝところは、以て佛因位に於ける大慈悲の願心の意義を開き出さんとするものであり、而して下卷に於ては又一一の莊嚴果成の相を説いてその不可思議の力用を顯はさうとしてゐる。因に於ける願と果に於ける力と互に相成して衆生を攝して以て無爲涅槃の證を得しめずんば止まぬのである。鸞師がその淨土觀に於て、この願心莊嚴の世界なると共に法性の實理に順ぜらるゝものと爲し、その兩義が同一本源根柢より流出するものであることを力説してゐる、そこにその特色があると見ることは何人も首肯せざるを得ぬところである。

これと同一の意趣は又その如來觀に於て見ることが出来る。既に淨土は如來の建立莊嚴し給ふところで、それは如來自らの自己表現の開顯に外ならず、淨土を外にしては如來の具體的實質的な相を拜することは出来ない。又如來の願心を外にしその善住力を離れての淨土は全く無意義なものとなつてしまふこと勿論である。それ故に淨土は如來の建立するところなると共に如來はその淨土莊嚴の一部として最も中心的な位置を占めてゐるので、この二は全く同一性質のものでなければならぬ。所謂依正人法の不二互融が特に強調して論ぜられてゐることは、この兩者の關係の分離が重大なる旨趣をもつてゐるが爲めであるとせねばならぬ。もとゞゞ如來の語が如は一如法性をあらはし、來は來生來現であつて慈悲方便廻向の過程を示さんとするもの、法界の實性眞理はその全分を擧げて衆生界へ廻向表現せんとする力用をそれ自身のうちにもつ。而してこれが法藏菩薩の眞實無漏の永劫に亙りての願行の上に體現せられて、

吾等をして歸依願樂せしめずば止まざる如來の御姿が出来上るのである。これ天親論主が淨入願心章に於て、「三種の成就是願心をもて莊嚴したまへり」としてその所以を示して「一法句に入るが故に」といひ、曇鸞が此處に法性法身、方便法身の二種法身を論じてゐる所以である。曰く「諸佛菩薩に二種の法身あり、一者法性法身なり二者方便法身なり。法性法身に由りて方便法身を生じ、方便法身によりて法性法身を出す、此の二法身は異にして分つべからず、一にして同すべからず、是故に廣略相入して統ぶるに法の名を以てす」と。これは古來云はれてゐる如く、一は吾等の所歸の理想たる無爲涅槃を顯はし、一は衆生に應同する慈悲教化の根本たるを示し、又一は理であり性であるに對して、一は智であり修であり、この理智修性の不二なる法身が曇鸞の如來でありて、本願成就によりてあらはれたる盡十方無碍光如來は即ちこれである。又、論註下卷に讚嘆の如實修行なるべきを論ずるところに出でたる實相身爲物身の説も、一は如來が眞如實相を體得せるが故に實相身と名け、又他面衆生攝化の爲めに成就せる佛身なるを以て爲物身と名くるといふは、如來の自利圓滿の徳と利他圓滿の徳とをあらはすと稱せられてゐるが、これも前の二法身の説と同一の證驗に基くものといふを得るであらう。但し法性法身が直ちに實相身、方便法身が即ち爲物身なりといふにはあらず、實相爲物の二身は方便法身たる本願成就の報身に就てその二面を開き出したものであると論ぜられてゐるので、二法身説は高く廣く一如法性の方便應化の原理を顯はさんとし、二身説は近く卑く、凡夫實際の信行の味得の上より之を示したものであるといふ相違を認むべきであるが、ともに法性の實理を全くしてそれが直ちに慈悲方便となりて衆生を攝化するの義を段々重々に互りて示さうとしてゐることが見らるゝのである。

右の淨土及び如來に就ての觀と相對して、衆生は如何様に顯はされてゐるか。蓋し淨影が攝法身、攝淨土、攝衆生の三義を論じ、善導がこの三義を爲衆生の一に統歸せしめようとする意趣あつたことより考へても、佛力願力の攝持を論ずるにありて、衆生はその最も重要な論目でなければならぬ。而して、普通には、衆多の生死を受くるが故に衆生と名く等と稱せられて、生死生滅を経歷するを以てその義とすると考へられてゐるが、その生死生滅をして成立たしめてゐる根柢として、永遠不生の無爲自然の一如が當然考へられねばならぬであらう。これ曇鸞が淨土の衆生世間清淨を論ずるにあたりて、特に不増不減經の所説を引證し來りて、その衆生とは即ち不生不滅の義なりと云ひ、或は無生無滅是れ衆生の義なりと論じてゐる所以であらう。そしてこの生滅と無生無滅と、一見相反して相容れざる如く見ゆる二義が衆生の上に論ぜらるゝところに、これら兩義を貫きて成立せしめてゐるものが、一如自然の法爾の作用であり、佛願の攝持力を體認せざるを得ないのである。こゝに曇鸞の衆生觀の根本的なものが存すると考へらるゝのである。

けれども所謂衆生觀も先づ最も現實的なところから出發せなければならぬ。論主が願生徧究極の意義のあらはるゝところとして、既に普共諸衆生往生安樂國といつてゐる。この普共諸衆生の語の上に、既に衆生界の現相の種々の差別の機類が考へられてゐることが知られ、しかもそれら差別あるがまゝに、願生淨土の人としてあらゆる衆生が平等にみな如來の本願力に乗ずべしとしてゐることが見らるゝ。鸞師は論註八番問答に、この衆生を釋して、大經下卷の

本願成就の文を掲げて、そこに諸有衆生とあれば、一切の凡夫人みな往生を得るなりとし、又觀經下々品の文を引いて五逆十惡の罪人の往生を説いてゐるので、現にこれらの罪業を具足せる凡夫人を見て、所謂下凡爲主の旨を明にしてゐると稱せられてゐるところであるが、その凡夫といふは聖者と相對する意味をもちつゝ、しかも對立的なる意を超えてあらゆる衆生みな下々品の極重惡人の自覺に立たねばならぬことを語つてゐるとせねばならぬ。次で、逆謗攝不について、大觀二經相違に對する會釋は、大經は五逆と謗法との二種の重罪を具せるを以て往生を得ずと除き、觀經は五逆のみにて謗法の罪なきが故に往生を許すと釋せる言葉あるより、鸞師は所謂二罪の具不具を以て二經を會釋せるものと論ぜられて、後、善導が已造未造に約し、謗法闡提廻心皆往といへるに比して、未だ如來の大悲眞實を顯彰するに充分徹底せざる如く考へられてゐるやうであるが、恐らく鸞師は逆謗攝不といふ如き會釋そのものに此等の問答の主意が注がれてゐるのではなくして、謗法の一を極重罪として除き、其他は如何なる者も盡くみな往生を許さるべしとして、「但令不誹謗正法信佛因緣皆得往生」といへるところにその力點があり、即ち信佛因緣、換言すれば正法信認、從つて又如來願力の絶對性を強調せんとするところにその主意があり、逆謗攝不の論の如きは之を明かにせん爲めの豫料に過ぎぬとみるべきであつて、そのことは八番問答全體を熟視すれば何人も否定し得ぬところであらう。蓋し鸞師によれば謗法とは單に佛所説の法を謗るといふ如き意ではなくして、佛なく佛法なく菩薩なく菩薩の法なしとの見解に住するものを云ふ、これ吾等の世界には何等の萬人がそれを依處として歸趣すべき正法といふものあることなしとし、從つてその法に順じて進むべき道もなく、道に進み得たる人もなしとするものであつて、即ち何等眞實の理想なく念願するところなく、從つて未來の生を有せざると同時に現在一念の生をも破毀してゐるものといふべきで

あつて、この謗法の者がそのまゝ、として往生を得ざることは甚だ明かである。而してこの謗法以外のものは、即ち既に正法の存在を信認する者であつて、従つて必ずこれに隨順せざるを得ないのであつて、そこには自ら正法の鏡に照し出さるゝ現前生活の批判あり、同時に正法によりて開くる眞實の世界に到らんことを求めずには居れぬ。これやがて法性の徳をそのまゝ、顯はせる淨土に對しての願樂となり、又法性の具現者たる如來に對しての歸依となる。これ法そのものゝ力用なると同時に如來の本願力であつて、それによつて一切衆生か直ちに願生者となるのである。謗法の者を除くといふと雖、謗法の者とは且く反動的位置に立つてゐるが實はこれ正法隨順の機運に最も強くうながされ働きかけられてゐるものであつて、永遠の謗法者といふものは終にあり得べき筈はないのである。

この願生者が如何にして淨土に攝歸せらるゝかの過程を明にしたものが論に説かれたる五念門である。然るにこの衆生の攝歸せらるゝといふことは、右の考察によりても、たゞ法性に隨順しその任運自然なる力に乗托するの外なきこと明かである。これ曇鸞が五念門を説くにあたりて、極力それが如實修行相應ならざるべからざるを述べてゐる所以である。實とは法性の徳が淨土如來となりて顯はれたる眞實功德であつて、それは正道大慈悲を根として法性の無爲に即して眞實智慧慈悲の方便を具へてゐる。その方便の力用によりて吾等はおのづから五念の行を修せしめられ、五念の行を修することによりて、よく吾等をして法徳に契ふに至らしむ、これ五念の行の根本的性質であつて、これ以外の、各人がその意樂に任せての個人的行業の如きは往生の行業たり得ないことは甚だ明かである。鸞師が願生を論するにあたりても、凡夫の實の生死ありと執する考によりてこの苦惡の穢土を捨て、彼の勝妙の樂土に至らんと願する如きは眞の願生にあらずとして、往生は生即無生なりとし、之を無生の生と名けたる如き、又衆生の願樂す

10

るところ一切能く満足すと説きながら、無上菩提心を發すことなくして、たゞ彼國土の受樂間なきを聞いて樂の爲めに願する者は往生を得ずといへる如き、又淨土の證果を説いて衆生の機類は本は則ち三々九品の別なれども今は二二の殊異なき平等涅槃なりとし、二乗の種の生ぜざる純一大乘善根の境界なりといへる如き、みな之をあらはしてゐる。即ち五念門は法性の力がそのまゝ、如來の本願力となりて衆生を攝して淨土に歸せしめ、終に法性の徳に契はしむるその過程を表はしたものである。それ故に觀察門の下には、如實にこの觀を修すれば淨土に生れ彌陀を見奉りて、未證淨心の菩薩も上地の菩薩と同じく寂滅平等法身を證することを得ると力説してゐる。實に觀察の如實なるはたらきによりて、三界に於ける生滅の衆生は淨土の衆生となりて、涅槃の證を得て法身の菩薩と名けらるゝに至る。即ち不生不滅たる衆生の義が實證せらるゝのである。而して、この淨土の菩薩は大悲方便の願に乗じて、よく十方の無佛法の世界に出でて衆生を教化すと説かれてゐる、これ即ち廻向と名けらるゝところである。即ち衆生の正法に順するものは本願力によりて淨土に入り、又願力に乗じて穢土に還らしめらるゝ。

四

以上概見したる淨土と如來と衆生とは本願所攝の三大重要素と見ることが出來、それによりて本願が如何なる意義であるかを察し得るのであるが、なほ鸞師が正しく本願に對しての所見は不虛作住持功德の上に於て見ることが出来る。此の功德は淨土の依正主伴の二十九種莊嚴の中心であり結歸であることは今更云ふ迄もなく、二十九種莊嚴のあらはさんとする目的が如來の本願にあることを最も明に示してゐる。それ故に鸞師も「不虛作住持功德成就者蓋是

阿彌陀如來本願力也」と云つてゐる。然らばそは如何なる功德を成就せしむるやについての鸞師の證驗は一言にして云へば、すべての衆生が淨土に攝歸せられて、そこに平等法身を體得せしめらるゝにある。平等法身とは八地以上の菩薩として寂滅平等の涅槃を證する故にかく名けらるゝのであるが、同時に十方の世界に至りて諸佛を供養し、一切衆生を教化し度脱するの力用を具へ、而もそは自らの作心を須ひず、法爾自然の徳としておのづから成さるゝので、所謂報生三昧これである。これはやがて前に如來に就て論ぜられた法性法身と方便法身との二面が、淨土菩薩の所證の平等法身の上に具はりてゐることを語つてゐるので、菩薩は正覺華化生として如來と同證の天地に立つてゐる。曇鸞がかの二法身の説を爲すにあたりて、諸佛菩薩に二種の法身ありといへるも、またこの如來と菩薩が所證を同じくしてゐることが豫想せられてゐた爲めである。又この不虛作住持功德が如何にして成就せるかを明すにあたりて、これは本法藏菩薩の四十八願と今日阿彌陀如來の自在神力とにより、願は以て力を成じ力は以て願に就く、願徒然ならず、力虛設ならず、力願相符つて畢竟じて差はず故に成就といふ」といつてゐるのは、これ平等法身は一切諸佛菩薩の同證の境地であつて、すべてそれらを生み出す本であり、法藏の發願修行の目的もこゝにあつたのであるが、又平等法身といへる永遠の眞理を象徴せる人格は、法藏の願行によりて初めて具體的なる形を以てあらはされ、以て如來が今日實際の力用を具へしめらるゝに至つたことを語るものである。これによりて法身の菩薩は如來の因位と果位とを貫き結ぶ根柢に位し、衆生の歸するところと如來の所證と相一致することを示し、法性と方便との二面を具へて以て自利々他の徳の基く根本たることをあらはし、五念門行の歸するところであると共に又それを發起せしむるところのものである。この不虛作功德の法身は觀察門の究極としてあらはされてゐるがそれは直ちに轉じて方便廻向となら

ざるを得ない。鸞師が第五廻向門を釋して「一切苦惱の衆生を捨てずして心に常に常に作願して大悲心を成就す」といへるは、もと願生行者に就ていつたのであるけれど、これ行者が實の如く淨土の觀察に入りて平等法身を證するところにおのづから行ぜしめらるゝのであつて、即ち如來の本願力そのものをあらはすとせねばならぬ。宗祖の領解し給うたところも之に外ならぬと伺はるゝのである。

この廻向に就て鸞師が初めて往相還相の二を開き出したことも亦右の法身菩薩の體驗に基くものとせねばならぬ。往相とは衆生の淨土往相の相を云ひ、還相とは淨土菩薩の還來穢國の相を云ふ。論註の文の表面に於ては、吾等が淨土に往生せんとして五念門を修するに際して、自ら修する功德を以て他を導き、相共に願生せしめんとする廻向門を往相といひ、淨土に生じ終りて五功德門の果の與へらるゝ中、第五の園林遊戲地門によりて再び生死海に還り來りて衆生を教化するを還相と名くるのであつて、從つて往還ともに行者自らについて云ふものと稱せられてゐる。けれども既に五念門は如來の本願力に順する如實修行であるから如來心の體現といふ意を離れてはならない。行者の修するといふは如來の之を修し給へるところをそのまゝ受くるに外ならない。殊に觀察廻向は行者が如來の不虛作住持の力によりて能く平等法身を證するところに自ら行ぜしめらるゝところで、その法身の菩薩の行は如來の本願をそのまゝ體現するもの、即ち本願力そのものをあらはすのである。それ故に往還の二廻向も亦必ずこゝに於て論ぜられねばならぬところで、この菩薩の所證たる平等涅槃は吾等の理想として往相の歸着するところを示し、十方の國に遊びて衆生を教化するの用たる報生三昧は還相の發端を示すのである。又如來の法性法身は往相廻向を導き出し、その方便法身の大慈悲は還相廻向の基くところといはねばならぬ。故に不虛作住持功德の次に淨土の菩薩莊嚴を論じて四種の正

修行功德を明してゐることは、この菩薩が直ちに還來穢國の菩薩たる所以を示すものであり、而もそれは平等法身に具はる報生三昧に基くことを詮してゐる。又觀察を明すこと終りて之を淨入願心に歸し、更にそれより開き出せる善巧攝化以下の諸章に於て菩薩の自利々他の回向を成就して衆生を教化することを明してゐることは即ち還相の過程を示すものであつて、而してそれは如來の願心に乗托してのことであり、又法藏菩薩の修行を體現してゐるものであると見らるゝのである。これ鸞師が論註最後の結末に於て、菩薩の自利々他の廣説を結ぶにあたりて「覈求其本阿彌陀如來爲増上緣也」といひ、更に、凡そ是れ彼の淨土に生ずる(往相)と、及び彼の菩薩人天の所起の諸行(還相)とは皆阿彌陀如來の本願力に緣るなりといひて、第十八、十一、二十二の三願を以て的證してゐる所以である。その第十八願はいふ迄もなく十方衆生に對して念佛の衆生として往生せしめんと願であり、第十一願はその衆生を淨土に攝取して滅度の涅槃を得しめんとするものにて往相の證果として法性法身の無爲の徳をあらはすもの、第二十二願は淨土の衆生が菩薩として十方國土に教化を垂るゝことを願するもので、即ち方便法身に基く還相回向をあらはすものであることは宗祖の釋を待たずとも、鸞師のこの的證の上に見ることが出来る、即ち鸞師にありても往還ともに如來の本願力回向なりとするの意明なりといふべきである。而してこの三願によりて速得成就菩提を的證せんとする鸞師の意を探れば、如來願力によりて十八願の十方衆生は能く淨土に入ると共に又穢土に還來せしめられるゝのみならず、この還相の力が又能く衆生を教化成就して願生心を起さしむるのであつて、往相の究極するところに還相を起すと共に、還相の力によりてはじめて往相一念の心行を發起せしめるに至ることを示さんとしてゐると見るべきである。即ち第十一、二十二の二願は淨土の如來の法性方便の二徳を顯彰し、この二徳は往還の二回向となりて十方衆生に蒙らしめ、以て

14 第十八願の願生行者の機を成就せしむるのである。

之によりて往還二回向は以て念佛往生の機を成就せしむるものとして、即ち吾等衆生が現に受け與へらるゝところとして論ぜらるべきであつて、普通に還相を以て吾等が淨土に往生して後に初めて與へらるゝところと稱せられてるけれど、往生して後といふことは吾等の現實の問題から離れてしまふ。今菩薩の自利々他を論じ、それが本願力回向なることを強調するのは、還來穢國の菩薩の相を實際に拜し、その力が現に吾等に蒙りつゝあることを感じてゐるからのことである。この力が教となりて吾等の背後より教化成熟せしむるによりて、はじめて前面に於ける招喚の聲に托する往相の心行を成立せしむる。而してこの招喚に順ずるとき、吾等自ら實に淨土より還來する力に托せられてあることを知るのである。こゝに現生不退の確信が生ずる。鸞師が論註卷頭に大乘正定聚に入るといひ、それが佛力住持に依ると明してゐることに就ては議論のあるところであるけれど、必ずこの往還二回向の力が今現實にあらはれてゐる意をおのづから語つてゐるとするを至當といふべきである。

然らばこの往還二回向は現在此界の衆生に如何なる心行を發起せしむるか、それは一心五念であることは云ふを須ひないところであるが、しかも五念の中、觀察廻向は右に云へる如くその究竟的なるはたらきは主として淨土に菩薩として生ぜる上に就て論ぜられてあれば、願生行者の發起するところとしては、禮拜讚嘆作願の三門にありといひ得べく、そのことは既に論傷に於て論主自ら初の一行の表白に於てこの三門をあらはし、後の二門はこの三門によりておのづから體得せらるゝ境地としてあらはしてゐることによりても伺ひ得るところである。而して鸞師にありてはこの三門の中、特に第二の讚嘆門に重要な意義を置き、之を以てその中心代表のものとしてゐらるゝ如くである。讚嘆

とは云ふ迄もなく無碍光如來の御名を稱する也であるが、恐らく鸞師は五念門全體を貫く根本精神たる如實修行は、この讚嘆の稱名に於て最もよく顯はるゝものと見たので、それ故に、この下に特に之を明かにせん爲めに不如實修行の相を詳述して、以て之に對する如實修行を明してゐる。而してその讚嘆の對象たる如來の名義を開いて實相身爲物身の二身をあらはし、又讚嘆の心相を述べて信心の不淳不一不相續の三に對する淳一相續の三信を明し、この三信が即ち論主の一心であることを論じてゐる。即ち一心五念といへる願生者の心行は一心稱名となりてあらはされてゐるを知るのである。蓋し禮拜讚嘆作願の三門はたゞ一心歸命の意が三業にあらはれたるにて、その精神を同じくせるもの、而して禮拜は身業にあらはるゝ外面的表現であり、作願は歸命之意として内心の念願を表はすに對して、讚嘆の口業はその内外を貫通攝持してゐるものである。鸞師は既に佛の名號を以て經の體とすといつてゐるので、如來の本願は名號の上にその全體の意義を顯現せるにて、従つて稱名はよく十方衆生の無明の黒闇を破り、よく衆生の一切の志願を満て給ふところである。この破闇と滿願とは如來の法性と方便、或は實相爲物の二徳に相應するもので、やがて稱名はよく如來如實の證果に契はしむるものである。こゝに於て、鸞師は一心の信心を正因とし稱名を正行とする念佛往生の義を開き顯はしたものと云ふことが出来る。前の三願的證が第十八願を出發點とせること、又上卷終りに大觀二經の交際を説くにあたりて下々品の十念々佛を第十八願に合して論じてゐることも、この意に依るといふべきである。

五

以上述べるところを要するに、曇鸞にありては法性方便の二法身義をその教學の根本としてゐるといふことが出来る。この二は如來法身の二面であるが、同時に淨土の性質と爲りてあらはれ、如來の自利々他の力を起す本となり、衆生界に廻向する往還の二面となり、又一切衆生の理想と願生心を起さしむる根元とをあらはし、往生して與へらるる證果の兩面をあらはすもので、即ち淨土と穢土、如來と衆生との必然的關係の根據となりて、それらすべてを攝持してゐるものである。而してこれは久遠の如來の所證として永遠の眞理を示すもので、法藏菩薩の發心修行も之より生れ來つたものであるが、又法藏の發願修行は實に之を開覺し實現せんが爲めであつたので、それによりてはじめて具體的なる形となり、こゝに阿彌陀佛は直ちに久遠の如來の姿を現するに至り、淨土は法性に順じつゝ種々の妙莊嚴を成就せられ、自利々他往還二回向も實際の力用となりてあらはれ、以て吾等衆生をして一心歸命の願心を發起せしめ、稱名念佛の行をあらはすに至らしめたのである。鸞師は實にこの本願が法界任運の理に順ぜざる自然の力より起れるものなるを明かにし、以て如來淨土の因果も衆生往生の因果も悉く本願力の然らしむるところなる所以を明かにしてゐるのである。宗祖の正信偈に「報土因果顯誓願往還回向由他力」と云へるは即ち之を示すもので、この他力回向の教義を建てたるところに鸞師の功績が存すると稱せられるは當然である。然るにこの他力廻向の道は右に云へる如く法藏の法性の理に順じて開きたる永遠の道であつて、既に開かれたる他力道に吾等衆生は乗托するので、衆生の願生心はこの既に廻向し給へる他力によりて發起するのであるが、又一面より云へばこの他力廻向の道は吾等衆生が歸命願生の心を起すことにより、その爲めに開かるゝところなるを知る。何となれば如來に法性方便の二身を具ふることとは三界の衆生あるが爲めであつて、若し三界苦惱の衆生なくば、如來はたゞ寂滅平等の涅槃界に安住することを以

て満足す。そこには無爲自然の世界あるのみで、如來に何等の意欲なく願心なく、従つて發心修行もない。即ち單に法性法身の一面を以て足れりと爲し、敢て方便法身の大悲を要しないのである。否、實には法性無爲それ自身も影をひそめ終るであらう。然るに平等の涅槃界の永遠に存すると共に三界差別の衆生界も亦無始の昔よりあり、之によりて方便法身をあらはし法藏の發願修行をおこさしめたのである。而して三界の衆生ありといふことはその現實的な意味としては、こゝに自己一人の存するといふことであり、自己を離れては衆生といふことも考ふことが出来ない。

即ち自己あるが爲めに如來は二法身を成就し法藏の願行となり、淨土は莊嚴せられ、往還の廻向が實際にあらはるゝので、自ら本願に歸するといふことが即ち本願力そのものを顯彰することである。自ら本願に歸するといふ事實を外にしては本願といふも如來といふも全く無意義に終るのである。宗祖が文類偈に如來本願顯稱名と宣へることは前に云へる五念門行の中、願生行者にとりては第二讚嘆門の稱名を中心とし代表とする意をあらはしたものであるが、又今いふところの、本願は自己の稱名にあらはれ、自己の稱名によりて如來の本願をあらはす意なりといふべきである。こゝに他力廻向の眞義がある。廻向とは本願力の現實自己に働きつゝあるところに於て論ぜらる。即ち如來の本願成就といふも廻向成就といふも、この自己の稱名にあらはるゝところに初めていはるゝので、如來は十劫の昔に既に正覺を成じやがて久遠の佛身を現すると共に、正覺の光も久遠劫來のものとして輝くとは云へども、そは我れ自ら本願に順ずる稱名の上に廻向成就を感ずるところに初めて信知せらるゝのである。廻向と云ふも十劫の昔に既に成就し終りたる功德をとり出して吾等一々の衆生に分與するといふ如き意味ではない。如來は久遠の正覺をあらはしながら、而も因位法藏としての發願修行を永久に廢せず、以て吾等一々の衆生の救濟にその全分の力をつくし給ふ。こゝに自己

一人の爲めに特に開かるゝ道なるを感ぜしめらるゝのであるが、その時同時に、そはやがて萬人の等しく歸入すべき道なることを知らしめらるゝのである。即ち我れ自らの稱名は實は本願力廻向の意義を實際に開き出すものといふべきである。故に他力に歸すといふは自らその行業に於て何等か遮する意味あるのではない。もとよりその努力を廢する如き意ではない。寧ろ己れを忘れて如來の行を行ぜんとするもので自ら本願力に參與し參加することになければならぬ。こゝに於てこの他力廻向の道は法性の理に順ぜる永遠の道たると同時に、特に自己の爲めに開かるゝ道であつて、それ故に吾等が必然に歸入せしめられねばならぬところのものである。